

構造の変化が進んだ。

第8章は、変わり続ける横浜中華街を描いている。中国の改革開放後に来日した新華僑のなかには、中華街で中国料理店を開業する者が増える一方、老華僑の老舗の閉業が目立つようになった。また中華街のイメージとは若干異なる店舗の出店や古い店の急増も中華街の多様性の現れといえる。みなとみらい線の開通という外部環境の変化および中華街内部（例えば食べ放題を導入する店の急増）の変化、また年間を通してのイベント開催等により中華街に様々な変化が見られるようになった。

第9章では横浜中華街、神戸の南京町、長崎新地中華街の日本三大中華街の歴史と特徴を説明したうえ、著者がいち早く注目していた新華僑がつくったニューチャイナタウンを取り上げている。池袋チャイナタウン（著者が命名）を日本最初のニューチャイナタウン、西川口チャイナタウンを郊外型のニューチャイナタウンとして、それぞれ位置づけたことは地理学者特有の視点といえよう。

第10章では、世界に誇る横浜中華街を牌樓の有無や数、チャイナタウンの規模から世界各地のチャイナタウンを比較し、横浜中華街の特色を再検討している。また横浜中華街モデルが韓国の仁川中華街に伝播したという指摘も興味深い。

終章では、横浜中華街発展会の理事長へのインタビューとともに、横浜中華街の課題と未来について展望している。横浜中華街はSDGs（持続可能な開発目標）の街になる、横浜中華街はゲートウェイになるという発展会の目標を、評者としても高く評価したい。著者は中華街博物館の設立を期待しているが、評者は横浜中華街自体が立派なフィールドミュージアムだと思う。横浜中華街のファンとして、今後の発展に注目したい。

以上、本書の概要を紹介してきた。著者は大学院時代（山下、1979）から横浜中華街をフィール

ドとしてチャイナタウン研究や華僑の研究を始め、その後、世界のチャイナタウン、華僑・華人社会、多民族社会など幅広く調査研究してきた。本書は間違いなく著者の思い出が最も深い一冊であり、中華街研究のたいへん貴重な成果といえる。本書の「はじめに」から、著者の研究軌跡を知ることができるが、本書は、これから研究者を目指す大学院生や若手研究者に多くのことを示唆している。地域史や日本近代史の観点からも興味深く読んでもらえる傑作である。また華僑社会を深く理解するためにも、本書の購読をぜひ薦めたい。

（張 貴民）

## 文 献

山下清海（1979）：横浜中華街在留中国人の生活様式。人文地理, 31, 321-348.

漆原和子・藤塚吉浩・松山 洋・大西宏治編：『図説 世界の地域問題 100』ナカニシヤ出版、2021年12月刊、219p., 2,700円（税別）

執筆された方から書評を書けないかと連絡があつて、まだ現物を見ないうちに了解した（外国研究でお世話になった方だ）。本が配達されて、中身を見てみると、殆ど個別の執筆者が100のトピックを書いている。どこから手を付けて良いか迷った。

すでに前号で書評を書いているし、そもそも私は書評を書くタイプではない。だから今回の号はパスしようと思っていた。しかし編集委員長から「書評は本の売上にも影響するのだから、なるべく早く書いた方が良い」というメールが届いた。

全くその通りだと思う（実にプラグマティックな考え方だ）。もし私の文章が気に入ったら、読者の皆さん、校費で一冊を購入して、大学の図書

館に入れて下さい。



本書は2007年に出版された『図説 世界の地域問題』の後継である。旧版では世界中から80の地域問題が取り上げられた。この版で地域問題は100に増えた。世界は問題に溢れていて、私達の研究の題材は尽きない。

「まえがき」の一部を抜粋する。「できるだけ読者が理解しやすいように、それぞれのテーマの導入に工夫を凝らし、図表を多様した。世界も日本も広い範囲からテーマを収集し、地域の抱える直近の問題を扱いつつ、執筆者が考える対策をそれぞれの章の最後に書くように努めた。」

どこから手を付けて良いか迷ったが、しばらくページをめくってみて、この本は、好きな所から自由に読めば良いことに気付いた。地理は、個人の経験が生かされる分野である。例えば、中国から来た学生は、中国語で現地調査ができるというように。



本書の構成を紹介する。本書は九つの項目からなる。「総論」, 「世界」, 「オセアニア」, 「アフリカ」, 「ラテンアメリカ」, 「ヨーロッパ」, 「アジア」, 「日本」である。それぞれが2頁の短いトピック（地域問題）から構成されていて、全体で100のトピックが並ぶ。旧版と比べて、気候変動などの地球環境に関する問題が増えた。欧米では1990年代から話題になっていた問題である。

とりあえず目についたトピックをリストにする。「2 地域問題のを見つけ方」(執筆者：松山洋), 「10 地球温暖化」(安成哲三), 「12 エルニーニョ・ラニーニャ」(植田宏昭), 「20 メルボルンにおける人口の急拡大とコンパクトシティ政策」(堤純), 「25 モザンビークの都市問題」(寺谷亮司), 「29 アマゾンの森林消失と環境政策」(丸山浩明), 「34 肥満大国のアメリカ」(高柳長直), 「35 ハワイの

日系人の戦争の記憶」(影山穂波), 「37 オガララ帯水層と農業の持続性をめぐる課題」(二村太郎)(後半に続く)。

これらは、私が教えてもらった先生方や、一緒に研究をしていただいた方々だ。皆さん、今頃何をしているのだろうか？ ナカニシヤ出版の編集者・吉田千恵さんにも、随分お世話になった。読者の皆さんもきっと、どこかの頁で、繋がりのある人が見つかる。文章を読んだだけの繋がりかもしれないけれど。



(続き)「44 オランダにおける農業と自然」(伊藤貴啓), 「47 地球温暖化とヨーロッパアルプスのスキー場」(呉羽正昭), 「48 変わる東ヨーロッパの環境問題」(加賀美雅弘), 「56 南アジアの高山における氷河の変化とその社会問題」(渡辺悌二), 「63 ベトナムの韓国人移住者」(金料哲), 「77 熊本地震とサプライチェーン」(鹿嶋洋), 「94 九十九里浜の海岸侵食と海浜観光の動向」(中西遼太郎)。

執筆者は、約70名の大学教員である。北は北海道大学から、南は琉球大学まで揃っている。所属する学部も、文学、社会、環境、理学など、たいがい網羅されている。私立文系から国立理系まで、オール・スターの執筆陣である。

「はじめに」を読むと、この本が想定する読者は、高校生(探求学習)や、卒論のテーマで迷っている学部生であるという。確かに彼/彼女達は迷っている。「この本を読んで先生の研究室に来ました！」という学生がいたら、執筆者も感激するだろう。



トピックの一例を紹介する。総論「2 地域問題のを見つけ方」では、「問題発見の論理」が説明される。王道はないという結論が最初に書いてある。しかし「とりあえず行ってみる」ことや「繰

り返し行ってみる」ことの大切さが説明される。とりあえず行ってみて、「日本経緯度原点」や「日本水準原点」など、地理好きにとっての聖地が、想定外の状態だったことに驚かされる（この頁の執筆者が）。



本の帯には「主題図で読み解く現在の世界」とある。さらに「社会科の教材作りや卒論・レポートに」とある。確かに、どのトピックにも主題図（地図）があって分かりやすく読める。

今では地図の殆どが、地理情報システムで自動で作られるようになった。そのような地図の多くを私は「鯛焼地図」と呼んでいる（魚型のモールドで作られた魚型のケーキのような物。大量生産も大切だが、全部がそうである必要はない）。

それらとは違って、この本の主題図は、時間を

かけて書かれている。「あとがき」には、この本の課題は地図をカラーにすることだと書かれている。しかし時間をかけた物であれば、それがカラーであれ白黒であれ美しい（見る人の心をとらえる。そもそも地図は人に何かを伝える方法だった。言葉や音楽と同じように）。



読み終えた後で、昔の紀要に山本先生と篠原先生が翻訳した内容を思い出した（獨協大学教養諸学研究30巻）。私の理解であるが、「この古くさい分野（地理）が（大学で）教え続けられている理由を、私達は真剣に考える必要がある」という内容だった。

この本は、10代終わりから20代初めにかけての若い人が読むのに、とても良い内容だと思う。

（仁平尊明）